

## 「されど波風体験」

- 自分の「大きな学力」に気づく時 -

2007年3月22日  
寺内 義和

### はじめに

(1) 今、時代と社会はどうなっているのか

- あらゆる分野を貫く「市場競争原理」
- 子どもが「心の闇」の中でさまよっている
- 何でも語り、はばたける「居場所（共同体）」がない
- 世の中の全てがいきづまり、閉塞状況にある
- 出口を求めて、弱肉強食の競争社会へ
- 学校教育もかつてない危機に直面している
- 公教育も「サービス産業化」へ（私学は真っ先に淘汰の対象）
- 日本の近代史の三大転換期
- 国体（「尊皇攘夷」） 平和と民主主義（「憲法・教育基本法」）
- 市場競争原理（「愛国心」と「成果主義」）
- 状況の危機から人間の危機へ - 人間の本质である「情熱」（目標）、
- 「類」（関係）、
- 「希望」（愛）の衰退、つまり、根源的危機（「仕方がない」病の蔓延）

(2) 今、何が問われているのか

- 人間性の発現
- 「生きる」とは
- 人間は、元気をなくしたり元気になったり、苦しんだり楽しんだり、
- 駄目になったり素晴らしくなったりしながら、生きている - その
- 分岐点とは

「人というのは、醜くもなったり、卑しくもなったりしますが、人というのは、気高くも美しくもなれるものだとこのことを、この番組に関わって思い知らされました」（プロジェクトXプロデューサー・今井 彰）

人間の本性とは

- イ) 「情熱」（目標） - 目標を持って、それに立ち向かう
- ロ) 「類」（関係） - 自然、社会、人々とつながって生きている
- ハ) 「人間愛」（ヒューマニズム） - 自己を愛するとともに他者を愛する

ニ) 「知恵」（「知りたい」） - 問題を解決する力を身につける

人間なら、誰もが感動する時

「人間になろう！」とは、「内的勝利」とは - 人間性の発現  
「大きな学力」とは

(3) 子どもと教育の何が問題なのか

なぜ、「少年事件」は続発するのか

- 「理解できない」（大人）、「気持ちはわかる」（高校生）

・「いい子の仮面をかぶっているのに疲れたのではないか」「たまったストレスが一気に爆発したのだと思う」「心の寂しい人だ。守りたい関係、何でも話せる関係や出会いがなかったのではないか」「居場所がなかった時、自分も人間を壊したかった」「やりきれない気持ちをどこかでバランスを保っているか、そうでないかの違いに過ぎない」（高校生・学生の声）

「奈良の16歳少年放火殺人事件」は何を示しているか

「学力低下」よりも「実存」の危機

イ) 「やりたいこと」（目標）が見つからず、さまよっている

- 自ら前に進む意欲、エネルギーの衰退

ロ) 人間関係に日々さいなまれ、疲れ切っている

- 人間関係の希薄さ、不自由さ

ハ) 自己の価値がわからず、自信が持てない

- 自己否定観の強さ、傷つきやすさ

ニ) 自己の殻に閉じこもり、自分のこと以外に関心がない

- 「自己中」「社会的文盲」

国際学力調査 数学的活用力1位、科学的活用力2位、読解力8位（2000年15歳対象）

数学的活用力6位、科学的活用力2位、読解力14位（2003年）

高校生調査「自分はダメな人間だと思う - 73%」（米国48%、中国37%）

「計画をやりとげる自信がある - 39%」（米国91%、中国77%）

「自殺を考えたことがある - 60%、その原因 - 人間関係60%」

「勉強は大切だ」73%、「全く、ほとんどしない」41%、「勉強は嫌い」74%

「これでは、学習する意味もわからず、社会（状況）は、『協力して切り開く』対象とならない。果たして、これで生きていけるのか」（都留文化大学・西本勝美）

「学力問題とは、学習意欲の低下と、できる子とできない子の二極化の問題である」（各紙社説）

小中学校教員調査「生徒指導に自信」6%（中国73%、英国47%）

「やや自信がある」55%（中国98%、英国97%）

「やめたいと思ったことがある」50%

このような問題が「教育基本法の改悪」や「学力テストの導入」で解決できるのか

- 押しつけの「国家教育」と、詰め込みの「競争教育」への逆流  
今時の青年は - 受験教育の落とし子（「泥んこ遊びを知らない子どもたち」）

- ・私的関心以外、何も関心がない。自分の世界、趣味に閉じこもる
- ・まじめだが、一生懸命やればやるほど内向し、「外に出ない」
- ・学校では、「授業」と「クラブ」だけはやるが、他は「余分なこと」
- ・「やらされている」論（飲み会も苦痛）
- ・「組合なんてダサイ」「組織はイヤ」
- ・青年だけで固まる（青年も固まらない）
- ・孤独感、徒労感に悩んでいる
- ・先入観にとらわれず、楽しいところ集まる

個々の子ども・青年・親だけの問題か！？（大人社会の反映）

「親が子どもにできることはほんの少し。結局、親は自分の人生を生きてみせるしかない」（山田 太一）

「大人の言うように子どもは育たない。大人のやるように子どもは育つ」（小出義雄）

「子供の苦悩、懊悩は、大人と同様に、むしろ、それよりもひたむきに深刻なのである」（坂口 安吾）

（4）大人社会はどうなっているか

- 競争万能、弱肉強食社会の中で

- イ）自己保持に窮々として、疲れ切っている - エゴ社会を形成
- ロ）共同体（心と心のつながり）が崩壊している - 「闇」が語れない、自己肯定感が低下
- ハ）希望、目標が持てない - 「仕方がない病」「あきらめ病」

自殺者 24,381人（'97年） 34,427人（'03年）...経済的理由 8,897人

凶悪犯罪 12,725件 21,530件

小・中学生の就学援助の受給者 4年間で4割増

大阪 27.9% 東京 24.8%（足立区 42.4%） 愛知 9%・5万5千人

- 全国平均 12.8%

所得格差の拡大（「ワーキングプア」）の深刻な実態

- 「生活保護以下の収入」10%・400万世帯 「不正規労働者」32%・1590万人

「自由競争原理とは、食うか食われるかのケダモノの世界である。そこには、日本人の美德であった『惻隠の情』は指先ほどもない」（「愚かなり、

市場競争原理信奉者」藤原正彦氏）

「今は弱肉強食、力が正義の社会で、孤独、不安、閉塞感の中で生きねばならない。しかし、多くの人が、『観客民主主義』で、自分でプレーしない。活力を失っている」（中坊公平）

「日本の社会は、『富める国の貧しい国民』『うちひしがれた人々の国』『多くの人が、この人生はどこかおかしいと思っている国』のように見える。それは、市民社会が大企業と官僚に乗っ取られ、無力になったからだ。先ず労働組合が、次に司法機関が、最後はマスコミが次々と呑み込まれ、『偽りのリアリティ』が社会を支配し、『仕方がない病』が蔓延している」（「人間を幸福にしない日本というシステム」ウォルフレン）

今日のテーマとは - いかに、人間と教育を復権し、市民民主主義を再生するか

危機とは状況の危機ではない

打開策がないこと、内発力が衰退することこそが真の危機である

## 1. 時代がもとめる人間力（「大きな学力」とは

（1）反転する生徒・青年群像

- 多くの子どもが、もがきながらひたむきに反転しようとしている

「大きな学力・弁論大会」の情景

「高校生フェスティバル」の躍動 - 「1億円募金運動」など運動のパイオニア - 青年教師軍団

自分の価値を見つけた時、人ははばたく姿勢に入る

<高校生フェスティバルとは>

- 「大人社会」と対極の世界

・「原爆の火」500キロ自転車リレー（昨夏）  
（各学園で文化祭と連結）

・「私学助成」と「平和」を両軸に、「1万人パレード」（昨秋）

・「1億円募金の達成」- 1億450万円に（今春）

・2万人新歓 - 全国高校生サミット（全国から14府県300人が参集・5月4日）

約1000人の群舞隊が中核に！

なぜ、全国から「救われました」という反響が寄せられるのか  
次々と生まれる人間ドラマとスターたち

なぜ、生徒は輝き、羽ばたくのか、そして、大人を乗り越えたのか

- 「大きな学力」の発現

「きっかけ」と「環境」があれば、子どもは大きく変化し、成長する

## (2) 「大きな学力」の主力

< 羽ばたき、反転する力とは >

目標をつくり、それを追求する力

「何を目標にしたらいいいかわからない。何のために生きているのかわからない。自分のもっていき場がないの」(有森裕子)

いかにしてメンタルを強くしたか(伊達公子「トークショー」)

関係を深め、広げる力

「人間にとっての最大の不幸は貧困ではなく孤独である」(マザー・テレサ)  
(自分は求められていない、必要とされていない。いてもいなくてもいい存在なのだという状態では、生きていけない)

「いじめ」「少年事件」「不登校」の主な要因とは

生きて働く知恵

イ) 自分の世界がどれだけ広がっているか

ロ) 時代、社会、生活、自然、人々とどれだけクロスしているか

ハ) 問題を解決し、状況を変える力がどれだけあるか

「オタク」と「大きな学力」の岐路 - 「社会力」

「学歴」や「偏差値学力」だけでは生きていけない

## 2. 「大きな学力」の源泉

### (1) 「はっとする」体験

「波風のたつ」体験 - 地獄、感動、達成感、発見、出会い.....

「主体的」体験 - 参画と挑戦

なぜ、「大きな学力」の生徒群像が、「授業」ではなく「高校生フェス」「自主活動」から次々と生まれたのか

授業改革の焦点とは(今年のサマーセミナーのテーマ - 「学びを波風体験に」)

### (2) 発展の道すじとは

滑らかな道を“一直線”に進むことではなく、一見、越えがたいような障害を“飛び越える”こと、つまり、大小の飛躍の積み重ね  
飛躍には、障害物がある(目標には、必ずカベがある)

したがって、飛躍とは「つらさを感動へ」「苦しみを喜びへ」の転換が伴う

第一の岐路は「内的決断」- 「障害を目前にして、恐れ、たじろぎ、

回避するのか、それとも、飛び越えようと決断するのか」

果たして、一人で決断し、反転できるか - 「つながり」を生きる

### (3) 「反転」の条件 - 「関係の光」と「居場所」

< 関係の光とは > まなざし、触発、評価、支え、励まし...

< 居場所とは >

イ) やすらぎがある(闇が語れる、仲間意識がある、解放感がある)

ロ) 自分が必要とされていると実感できる

ハ) やりがいのある仕事がある

共鳴と応答がこだまする「世界」をいかにつくるか

### (4) 人間は「育てる」のではなく、「育つ」のである

- 学校と家庭、地域に、その土壌(居場所)をどうつくるか

「放つ」「待つ」「育つ」- 子どもが親の器量を超える時

< 教育の基本とは >

- 人間性を発現する「きっかけ」と「環境」を与えること  
「マン・ツー・マン」

現実(ナマ)の社会、人生、(多様な)人々とのクロス  
主体者として波風体験ができる場

「神は細部に宿る」ということ(「印象に残った教師」とは)  
教育の「常識」は、なぜ、次々と破綻するのか

- 「関係」と「居場所」の欠落

安城学園の生徒が、なぜ、「大きな学力・弁論大会」で六連覇したのか

## 3. 関係と居場所をどうつくるのか

### (1) 一人ひとりが「主体者」として「つながる」ために

人は、なぜ、徒労感にまみれるのか

「主体者になる」とは

イ) 「目標」の共有

ロ) 「関係」(つながり)の実感

ハ) 現実とのクロス

主体者になるテコ

・要求(目標) - 内発力(ガス)

・触発(関係) - 関係の光(マッチ)

} 「参画」

### (2) 関係をどうつくり、深めるか

- 「触発」の側面から

子どもたちをひきつける教師とは、父母とは、学校とは

- 人々をひきつける人間とは、リーダーとは、組織とは
- イ) 最大の説得力は、論理ではなく「関係」
  - どれだけ、共に語り、飲み、ラーメンを食ったか、そして汗を流したか
- ロ) 「関係」ができた分だけ迫ることができる
  - 人間は、自分を認めてくれた人にしか、心を開かない  
(「何を言うかではなく、誰が言うか」)

呼びかけや説得は魂です。それは、率直な本音、情熱と、「何回足を運んだか」「何回電話をしたか」の行動力で示されます。それ以上の説得力は「関係」です。同じことを聞いても、誰が話したかによって、率直に納得することもあれば、反発することもよくあるのです。百の説教よりも、「何回一緒にラーメンを食い、酒を飲んだか」の方が重要なのです(『されど波風体験』p.129)

- 肝心なことは、「共感能力」と「聴く力」(応答する力)
- 教師(集団)の「器」以上の教育はできない - いか「器」を大きくするか
- 共感力はどこからくるか
- イ) 自らの「波風体験」(「お年寄りを大切にせよ」)
- ロ) 触発をあびること(「外のめしを食べてこい」)
- 学校、家庭、地域との連携は何をつくり出したか
- 「相対化」し「総評価」する人間観
  - 相対化することによって「束ねる」ことができる
  - 「祝婚歌」への反響が示していること
- 討論が成り立つ前提条件
- 人間は、評価される所に集まり、評価された点が伸びる
- 「大きな学力」は、反転する力(エネルギー)を主軸に、「偏差値学力」(知識の断片)、人間としての面白さ(仕事で役にたたなくても)、「負の力」(あやまち、失敗する力)も学力の部分として包含する
- (3) “要求”をどうつかむか
  - “要求”の側面から
  - 人間をどう見るか
    - 不条理な存在である
    - 「ガンコ親父」と「キマジメ教師」の落とし穴
    - しかし、誰もが人間らしい要求をもっている
  - イ) 我欲、利己(賃金、自由…)
  - ロ) 「生きる」(目標、ふれあい、存在感…)

- 八) 利他(「人の役に立ちたい」「喜んでほしい」…)
- 青年教師の最大の要求とは
  - 「生徒との関係」「授業」「居場所(解放感、認められる、やりがい)」
  - 結局、人間は、どちらが「居心地がいいか」「自分の要求の受け皿」となるか、「評価」されるか、つまりは、「主体者」になれるかどうかで寄ってくる
  - 要求にしがみつき、「こうあるべき」論を排除
  - 要求は「参加」と「触発」の中で発展する
  - ・「ロック」「日仏合同シンポ」「ボランティア」「1億円募金」「1万人パレード」「学校改革」(生徒)
  - ・「子どものこと」「学校、私学、教育のこと」「生きること」(父母)
- 目標とは、要求を組織すること
- (4) 青年教師にいかについたか
  - 「信頼」「関係」を前提に
  - 総評価と相対化の視点
    - 「リーダー」の共鳴力、聞く力が試される
  - 青年の感覚を大切にし、あるがままの要求を組織すること
    - 青年にアイデンティティーを
  - 時代、世の中、人々とクロスする世界へ
    - 「門立ちよりも父母提携を」「学校に閉じこめるな、外へ連れ出せ」
  - 状況を変えた「典型実践」の発掘と学習、交流
    - 素直な感応力、共鳴力、吸収力を
  - 「形式主義」「技術論」「小賢しさ」の打破
    - 大局観、想像力、「破る」挑戦心
- <青年教師の活動をみて感心すること>
  - 「新人組織率70%~80%」と「核なき流星群」
  - 素朴に要求をつかむ力(「こうあるべきだ」の固定観念がない)
  - 一人一人をつかみ、評価する力のすごさ(少し甘ったるいが…)
  - 「『外』に連れ出してくれ!」(親組への要求、校務のルツボからの解放)
  - 私教連運動の一翼として独自の目標を打ち出し、「学習会」と「レク」を両輪に運動をカーニバル化
- (6) 今、特にリーダーに求められること

直感力（体験と問題意識、特に危機感）、応答力（吸収力、多面的に評価する力、感謝する力）、そして、何よりも執念（ほとばしる情熱と行動力）と解放感が求められる

外へ「連れだし」、ナマの情勢、社会、人々とクロスさせる力

- 人間と組織を元気にする法則

「内的勝利」こそ最大の成果とみる視点

- いかに、人間の幸せ、生きがい、活性化につながったか

「強くなければ生きていけない。優しくなければ、生きている意味がない」

（映画「ブ

レイバック」）

中小企業家同友会の最大の優位性とは

さいごに - とにかく、明るく、気高く、カーニバル的に

(1) 時代の争点

- 「競争か共生か」「企業の論理か人間の条理か」「閉じこめるのか、開きつなぐのか」

(2) 理想や展望は、運動そのものの中にある

- 「求めれば助け（変化）は来る。しかし、君の知らない仕方

で」（大江健三郎）

<「されど波風体験」を読んで 三重大・学生>

何か困った時、支えが必要な時、素直に人に助けを求めることができる。これこそが人間としての真の強さだと思います。人間とは弱い生き物。同時に、強がりな生き物でもあります。「甘えるな」「凶々しい」という風潮の中で、自分の弱さをさらけ出し、「人に助けを求める」ことは勇気のいることです。これほど難しいものではありません。

しか、ある一線を越えてそれができるようになると、今までフラストレーションでがんじがらめにされていた心の中に、オアシスができるのです。そして、それによって、時に解決の道が開け、自分自身、1つ成長できるのです。

私は、このことに気づくまで、相当の歳月を要しました。しかし、これに気づいた時、障害を持って生きていることが真に楽しいと思えたのです。

だから、「求めても良い」ではなく、「求めなさい」なのです。「求めなければ、与えられない」のです。

<人生を振り返って 中坊公平氏>

「自分は、何をやった時も常に成算がなかった。ただ、ある理念に向かってあきらめず、ひたすらに懸命に生きてきた。自分の利益のためのひたむきさには誰も共鳴しなかったが、他者のためにひたむきになった時、必ず、思わぬ人々が駆けつけ、道が切り開かれた」

(3) 何が苦悩を解放するのか

- 広い視野で、目標に向かうプロセスの「今を、切に、つながりを生きる」

<室伏広治 - 世界最高を出しながら、オリンピック前に新しいコーチに指導を求めて>

「重しがとれて楽になった感じ。そうじゃなくちゃ駄目だと思う。それは、楽をするということではなく、遠くへ投げることにわくわくする、自分が磨かれていくことにわくわくすることが重要。視野の広い集中の仕方が一番大事で、どんどん狭く集中するということがあるが、それは、自分を追い込むだけだ。どれだけ広く見えるかがテーマだと思う」

<大江健三郎 - 21世紀の子どもたちへ>

21世紀に生きるあなた方に伝えたい言葉をひとつだけ選べ、と言われたら、私はこう言います。「ある時間、待ってみる力」をふるい起こすように！

それは、子どもにはもちろん、大人にとっても、生きてゆく上で、本当に難しい問題にぶつかった時、一応、それを括弧に入れて、「ある時間」おいておく。そうやって生きてゆくという大きい数式を計算し続けるのです。初めから逃げる、というのとは違います。

そのうち、括弧の中の問題が、自然に解けてしまうことがあります。（子どもの場合「ある時間」の間に自分が成長し、たくましくなっているからです）

そして、「ある時間」たって括弧を置いてみても、未だ問題がそのままであれば、今度こそ正面からそれに立ち向かってゆかなければなりません。地獄の方向に向かって決断するのです。私は、そのようにしてやって来ました。そして、現にいま、生きています。

<今井 彰 - プロジェクトX プロデューサー>

「『プロジェクトX』に出てくる人々は、いくつになっても闘う。負けない。自分たちの状況を少しでも良くするために、あきらめずに生き抜いた人々です。あきらめた瞬間にどんどん下り坂に行く。でも、あきらめなかったら、必ずその日が訪れることをいくつものケースで証明していきたいのです」

(4) 「希望の光」とは

- 「夜のカフェテラス」（ゴッホ）に寄せて

「自分たちが生きてここから出られる可能性なんて5%もないだろう。その上に、こんなにも人間ではないような扱いを受けている。これは悲惨の、苦悩の極まりだ。みんな、もう早く死んで楽になりたい、人生に期待することなんて何もない、と思っているだろう。しかし、人生の方があなた方に期待しているのではないか。あなたを必要とする“何か”があり、“誰か”が必ず待っている。例えば、小さい子どもや妻が、どこかで自分を待っているかもしれない。あるいは、自分のやり残した仕事自分が待っているんじゃないか。人生とは、最後の瞬間まで、その呼びかけに応えようとするのではないだろうか」

（フランクル「夜と霧」）

生命は

吉野 弘

生命は  
自分自身で完結できないように  
つくられているらしい

花も

めしべとおしべが揃っているだけでは  
不十分で

虫や風が訪れて

めしべとおしべを仲立ちする

生命はすべて

そのなかに欠如を抱き

それを他者から満たしてもらうのだ

.....

花が咲いている

すぐ近くまで

虹の姿をした他者が

光りをまとって飛んできている

私も あるとき

誰かのための虹だったろう

あなたも あるとき